





第7章

農業に未来を託す島

喜界島

石黒悦爾
(鹿児島大学農学部)

桑原季雄
(鹿児島大学法文学部)

植村義彦
(喜界町役場経済課)



喜界島は奄美大島の東北端に位置し、鹿児島から380km、名瀬市から69kmの太平洋上にある。島の面積は57km²で、北東から南南西に長く、東西7.8km、南北の最長14km、周囲約49kmである。ほぼ島全体が第4紀石灰岩でおおわれ、島の大半は隆起サンゴ礁で

ある。また、一年間に1.5～1.9mmずつ隆起しているともいわれる。大陸と陸続きののち、いったん海中に沈降し、珊瑚礁の隆起で再び島になったことから、古代から生き続けている動植物相はほとんどみられない。毒蛇ハブのような害虫もなく、また人を寄せつけない自然の



海岸近くの集落 ©桑原季雄

険しい地形や景観もない。人間にとってはたいへんやさしい感じの島であるといえる。

集落は主に海岸線に沿って展開し、各集落の後背地は農地となっている。島の中央東よりを南北に走る百之台丘陵は最も高いところで標高 225m、東から西に向

かってゆるやかに傾斜する。概して平坦な島で、河川はほとんどない。気候は温暖で、1966 年から 1995 年までの過去 30 年間の平均気温は 22.4℃、平均降雨量は 2,230mm である。

人口は戦前において 2 万人を超えていたが、戦後は急速に減少し、現在は 1 万人を割り込んで 9,296 人である。人口の約 3 割は島の西南部の湾・赤連地区に集中し、他のほとんどの集落では過疎化・少子高齢化が著しい。

喜界島は 1466 年(文正元年)の琉球王の喜界島討伐からおよそ 150 年間琉球王の統治下にあったが、1609 年(慶長 14 年)の島津藩の琉球征伐の結果、琉球から分割され、1871 年(明治 4 年)の廃藩置県まで、約 260 年の長きにわたって島津藩に属した。戦後は 1946 年(昭和 21 年)米軍によって日本本土と行政分離され、およそ 8 年の間、米軍占領下に置かれたが、1953 年(昭和 28 年)12 月 25 日、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島とともに祖国復帰を実現した。

源平来島伝説

喜界島には源為朝をはじめとして、僧俊寛や平家の落人に至るまで多くの来島伝説がある。源為朝が最初に着いたのが喜界島の小野津といわれている。為朝は島の近くまで来ると、住民の存在を確かめようとして狩股の矢を放ち、上陸後、その矢を抜き取ってみると、その後から清水が湧き出した。これが「カリマタの泉」の伝説である。やがて為朝は西の方に大きな島影を見て、大島に渡った後、さらに船出して徳之島、沖永良部を経て、琉球に到達したとされる。

次に平家来島伝説であるが、長門の壇ノ浦の合戦の前夜、豊前の国から九州南表へ逃れた平家の一団は、屋久島を経て喜界島に上陸した。そこで3年滞在しているうちに、近くに大きな島があるのを発見し、主のいない島だということで、三方から船を乗りつけて攻めた。全島の平定がなると、資盛は島の西南部、加計呂麻島の諸鈍に城を構え、有盛は北部、名瀬市の浦上に居住し、行盛は東部、龍郷町の戸口に城を築いたとされ

る。

僧俊寛の来島に至っては、その信憑性をめぐって考古学的調査まで行われた。こうした源平の来島伝説の背景には、歴史の表面には表れない武士や倭寇の来襲があったことが想像される。後の倭寇の中心地の一つは薩摩の坊ノ津で、彼らは南西諸島を経て、広東や福建などに達した。中世奄美にも、武器を持った一団が幾度か上陸したとみられ、こうしたことが、源平伝説が発生し助長されてきた背景にあると考えられている。

平家落人の伝説を持つ地は、全国に60～70カ所以上もあるといわれている。これらの伝説は、悲劇的な最後を遂げた英雄に対する愛惜の情、遠い都への敬慕の情、自分の家柄を高貴なものに結びつけて権威を誇ろうとする心情などが大きく作用しているとされる。特に奄美諸島においては「ネリヤ」という、海の彼方の神境に対する信仰があったため、こうしたことも源平伝説を育てるにはとても都合がよかったのではないかと考えられている。

琉球からの来島者 ノロ

奄美の文化は、固有の基層文化に、源平伝説にみるような日本本土から渡来した人たちの影響を受けた。しかし、一番影響の大きかったのは琉球時代にもたらされた様々な琉球文化であろう。この時代、衣食住を主とする奄美の生活文化はすべての面で琉球化された。しかし、同じ琉球文化でも古典音楽や古典舞踊のような宮廷芸能は伝わらなかった。そのかわり庶民芸能と実生活に即した物質文化や調理法、商法、漁法などが伝えられた。

そもそも琉球王が奄美の島々を支配下におさめた一番の目的は、貿易中継地としての良港と漁業権を得るためであったとされ、土地支配などは考えていなかった。琉球では古くから功勞のあった者を地方に任官するとき、その妻や姉妹、地方豪族の女子を女の神官ノ

ロ(祝女)に任命して派遣し、当地の一切の祭祀を任せるとともに、政治的にも利用した。彼女たちを直接支配し各地へ派遣したのは首里の^{きこえのおおきみ}聞得大君であった。このように、当時の琉球王はノロの神職組織によって住民を宗教的に掌握したのであった。また、ノロたちは、彼女たちが従っている首長のウナリ神(守護神)として、百姓や航海者の信仰を獲得し、また、首長のため、信仰者から貢租を集める者として、積極的な役割をになっていたとされる。喜界島を含む奄美群島各地では今日でも実際にノロの末裔が存在するところもあれば、ノロが使ったとされる神具などが残っている集落も多い。



石垣に挟まれた集落内の小道 ©桑原季雄

薩摩の来島者 代官と遠島人

薩摩時代には代官が来島し、砂糖専売制を行って島民を重税の苦しみに追いやった。薩摩藩は1753～1755年に、幕府の命を受けて木曾川改修の難工事を行い、大変な借金をした。その上、藩主島津重豪の派手な生活により、もっと大きな借財を作った。その苦しい藩の財政の建て直しの財源として、植民地奄美の砂糖に注目したのであった。

しかし、薩摩から来島してきた人間は、島民を「さとうきび地獄」に追いやった悪代官ばかりではなかった。薩摩藩は、記録によれば1789年から奄美諸島を流刑地と定めた。島流しされたのは主に、政治犯のような人たちで、罪の重さによって、軽い方から大島、喜界島、徳之島、沖永良部島と、だんだん遠いところに流された。この島流しを「遠島」といい、流人たちを「遠島人」といった。遠島人の中には高学の者も多く、奄美の史料として大変貴重な『南島雑話』の著者名越左源太や後の文学博士

しげのやすつぐ
重野安繹などが大島に遠島人として来島した。

喜界島に遠島された薩摩藩士の中には、島民の教育や文化の発展に貢献した者が多くいる。1809年に遠島になって来島した藩士に偉大な学者伊地知季安いじちきあんがいた。島民は季安の学識の高いのを知ると、彼のために小さな居宅を作って子供たちの師匠として厚遇したという。こうして遠島から3年後に許されて帰藩するまで、季安は島民の啓蒙に大きく貢献したのであった。

また、これより先、寛延えびはらしょうぞうの頃(1748 - 1751)に海老原庄蔵以下11名の者が喜界島に流されている。彼らは密会中にキリシタンバテレンの嫌疑で検挙され、1750年(寛延3年)12月25日に流罪の刑で喜界島に遠島してきた。海老原も博学の人で、他の流人と同じく島の児童たちに読み書き習字を教え、島民の敬慕の的となったが、その生涯を淋しく孤島で終えたという。

幕末の1862年4月には、薩摩藩士村田新八むらたしんぱちが遠島人として来島した。村田は、島津久光公の不興を買って徳之島と沖永良部に相次いで島流しになった西郷隆

盛の同志で、喜界島に遠島となり、当時の湾村に住んだ。村田もまた、近隣の児童たちを集めて書を講じ字を教え、ときには青年たちの頼みに応じて柔術や相撲を教えた。当時の弟子たちの家には彼の筆になる漢書の教科書が保存されているといわれる。また、村田は和歌をよくし、そのうちの2首だけが、彼の寓居であった喜島桃園家に残っていると言われる。村田は、西郷が帰藩を赦された1864年（元治元年）に西郷と一緒に島を離れた。島民は村田新八の石碑を建て、今なお敬慕してやまない。

このように、薩摩時代の遠島人

で奄美の島民の教育や文化の発展に多少とも貢献した人は西郷隆盛をはじめとして決して少なくない。奄美諸島の遠島人たちは謹慎中の不自由な身でありながら奄美諸島の文化の向上と島民の啓発に尽くした。また、遠くは源平の世から、琉球・薩摩の両時代を通じて、奄美、喜界島には海の彼方から常に多くの来訪者があった。文化や情報は常に外から持ち込まれ続けてきた。この関係は現在でも大きくは変わっていない。しかし、情報化時代の今日、島からも様々な情報が発信されるようになってきた。

農業立島

1970年に策定された「喜界島長期総合振興計画」においてすでに「本町産業の中心は農業であり、その振興を促進するため農業基盤の整備及び農業経営の近代化を図り、高生産性農業を積極的に推進する」と述べられているように、喜界島における地域振興は早い時期から農業を基盤とした

産業振興という考え方にまとまっていた。「農業立島」という言葉も1972年頃から使われるようになった。その基幹作物はサトウキビである。

喜界島の農業振興に大きな自然的制約が二つあった。一つは、土地の基盤整備であり、もう一つは農業用水の問題であった。そのため、当然ながらこの農地整備と農業用水の問題を喜界町における「奄振」事業の中心にすえて最も力を入れた。特に、農業の生産

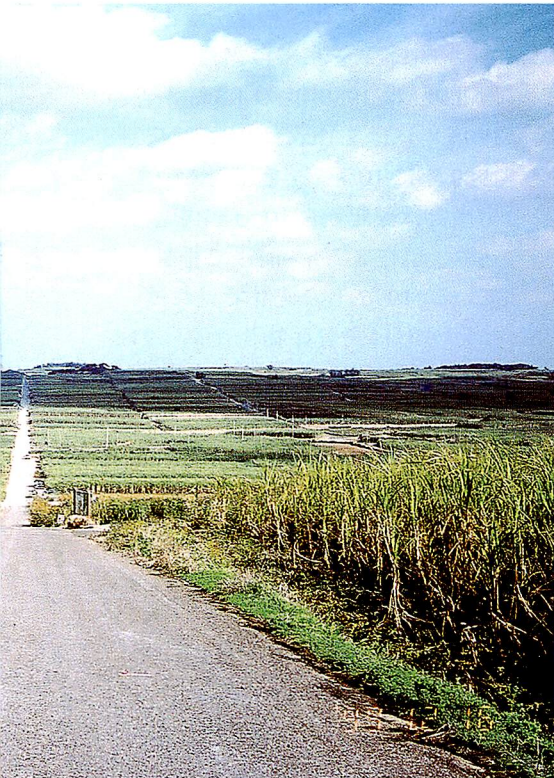
基盤である^{ほじょう}圃場整備は、農業を地域振興の基盤とする上で急務であった。1998年までに、圃場整備率と農道整備率はそれぞれ88.5%、68.4%に達している。また、農業用水の問題は、緩やかで起伏の少ない平坦な土地と透水性の琉球石灰岩に覆われた地質構造からくる恒常的な水不足にあった。そうしたなか、国営事業による地下ダム建設が浮上し、1973年に喜界地下ダム計画が採択され、1992年に着工し、1999年に地下ダムの止水壁が完成した。現在、用水を送るためのパイプラインと貯水池の設置工事が進んでいる。2010年には県営による末端灌漑施設整備が終了し、完成となる見込みである。

地下ダムの完成によって基幹作物であるサトウキビをはじめとする作物の増収、花き、園芸作物の生産向上が見込まれている。行政はこれら2つの柱、すなわち基盤整備と水資源開発の推進とともに大型機械の導入によって生産規模の拡大や担い手農家の減少および高齢化問題の克服を目指している。



群島一の サトウキビ

喜界島の農業は、農家一戸あたりのサトウキビの耕地面積ならびに10aあたりの収量は奄美群島一である。サトウキビは他の農作物に比べて植え付けや収穫に手



サトウキビ畑をまっすぐ突き抜ける農道（左） 機械化されたサトウキビ工場（右上）

サトウキビの収穫（右下） ©桑原季雄

がかからず気候にも影響されにくい利点から、奄美群島全域で多くの人が従事しており、行政も様々な形でこの産業に力を注いできた。サトウキビは1609年（慶長14年）に、奄美大島大和村の直川智平なおかわらによって製糖法とともに中国福建省から伝来された。沖縄でもそれ以

前にサトウキビが作られていたようであるが、製糖法の伝来は1612年と記録されている。

サトウキビの経済栽培適地は、年平均気温20℃以上で、降霜がなく、生育期に降雨が十分にあり、成熟期には好天と乾燥が続くことが理想とされる。世界の栽培地は

北緯 35 度から南緯 37 度の範囲に分布するが、温度に恵まれた熱帯であっても、乾期と雨期が明瞭な気候でなければ適地とはいえない。干魃や台風、塩害にも比較的強く、干魃と台風が激しい南西諸島において、サトウキビは最大 30% 程度の減収に留まり、適作といえる。また、日照時間が長く、高温多湿条件にあるほど収穫が高まる。ちなみに南西諸島は年降水量が 1,800 ~ 2,500mm もあり、栽培適地の降水量 1,500 ~ 2,000mm に達している。喜界島は年平均気温 21℃ 前後で亜熱帯海洋性気候なのでサトウキビ作りに大変適している。

1995 年現在、第一次、第二次、第三次産業の全就業人口に占める農業就業者数は 28% で、1980 年以降の過去 15 年間ほとんど変化していない。1997 年の統計によると、喜界島の耕地面積の 2,130ha に対して、サトウキビ畑は

1,076ha で、全体の約半分を占めている。また、農家一戸当たりの耕地面積は 1980 年の 1.3ha から 1995 年には 2.1ha と増えている。1989 年に 10 万トンを超えていた生産高は翌年から 10 万トンを割り込み、現在 8 万トン前後で推移している。1996 年の統計で見れば、サトウキビは全農産物生産高 (21 億 6,518 万円) の 74% を占める。喜界町のサトウキビ農業は、10a 当たりの収量、生産量、生産額とそのいずれにおいても奄美群島内の全市町村の中で 1 位であった。

しかし、喜界島の財政は、1997 年度の一般会計統計で見ると、歳入に占める自主財源は 14.2% で、残りの 85.8% は地方交付税等の依存財源である。「農業立島」を目指してはいるものの、財政的には他の奄美の島々と同様、自立経済への道が遠く険しいのが現状である。

超高齢社会

1990 年の国勢調査では、喜界島の人口は 9,641 人と初めて 10,000 人を割り込んだ。1999 年 12 月 1 日現在、9,360 人である。喜界島では昭和 30 年代 (1955 ~

1965) から確実に減少し始め、1995 年では昭和 30 年代の人口の 57.8% にしか満たない。

1995 年の国勢調査人口を 15 歳未満、15 ～ 64 歳、65 歳以上の 3 段階に分けた年齢階級別人口から見ると、経済の高度成長期に若年層が流出し、過疎化が進行した奄美群島の年齢構造は 65 歳以上の老年人口の割合が高く、その進行が急激になっている。喜界

島においては 65 歳以上の人口が 29% と、他の奄美群島市町村の中でも最も高く、また、農業人口から見ると、1995 年では 59 歳までの就業者の割合が 45% にもかかわらず、60 歳以上の就業者が 55% と大きく上回っている。1990 年から比較してみると、全体では伸び率が 87% と減少しているが、60 歳以上では 108% と増加している。

1997 年現在の統計によれば、



宴の夜 (上)
歌遊び風景 (下)
©桑原季雄

喜界島には1,540人の農業就業者がいるなかで、60歳以上の人が実に55%も占めている。逆に50歳以下は全体の23%しかいない。あと10年もすれば、単純に考えても、全体の70%を60歳以上の人が占めることになる。

日本では、1970年に国連の定める高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）が7%に達し、「高齢化社会」を迎えたが、他に例を見ない勢いで1995年には14%を超え、「高齢社

会」へと突入した。厚生省人口問題研究所の推計によると、2010年には高齢化率は20%を超え、欧米諸国の高齢先進国に先駆けて日本は世界初の「超高齢社会」になり、4人に一人が65歳以上の高齢者となることが予想されている。喜界島においても高齢化率は増加し続けており、1999年の市町村調査によると、高齢化率は国や県を大きく上回る31.2%と、1995年の29%からさらに上昇した。

農業立島の将来

このように数字だけを見ても農業人口の減少と就業者の高齢化がみてとれる。課題として、生産性の向上を図り、また担い手農家育成のための農業環境整備があげられる。

また、地域農業の発展を図るためには、地域ぐるみで農地、農業機械・施設、労働力を効率的に活用していく取り組みを推進するとともに、担い手農家の農業経営の確立を市町村や農協などが支援す

る体制を一体的に整備していく必要も指摘されている。2000～2001年産のサトウキビの農家手取額は1tあたり20,450円に決定した。輸入粗糖の8～9倍の額で国に買い取ってもらっている状況だ。しかも、コメのように生産調整もなく、出荷の手間や販路の確保、市況を気にすることもない。今後は、第3セクターで運営されている農業開発組合をはじめ、各集落に形成されつつある営農集団による農作業の受託が増えるであろう。そうなれば植付と管理は自分で、水まきは地下ダムのスプリンクラーで、刈取はハーベスターで、というように

年若い農家でも十分サトウキビの栽培が続けられる。そのためには農地の流動化や農道の拡幅等が必要になってくる。

また、今後は、市場の需要動向に応じた収益性の高い園芸作物や畜産などを組み合わせた複合型農業の推進が行政における地域振興としての喜界島農業のビジョンである。現在では花き、野菜、果樹、肉用牛などその他の作目の生産も様々な要素の上に発展している。特に、キク栽培は近年大きく成長しており、地域興しとしても力を入れている地区もある。ごまの栽培も盛んで、その生産は日本一を誇る。このような果樹園芸・畜産は、サトウキビとの複合経営によって更なる成長が見込まれる。喜界島にはゴマや花良治ミカン、タンカン、寒小菊など21世紀を迎える今こそもっと見直すべきだと思われる作物も数多くある。

このように明るい材料を並べてみても益々高齢化が進むなかに

あつては、肝心の新規就農者（後継者）が参入してこなければ意味がない。現在は地下ダムの工事があり島の若者も大勢それに従事しているが、それも平成15年までにはすべて終了してしまう。その後は公共事業といっても、農地の90%以上も基盤整備が済んでいる喜界島において残るめぼしい事業は集落排水事業くらいである。若者がスムーズに農業に移行できるようにするためには農地、農業機械や軌道に乗るまでの生活資金の問題等をクリアしなければならない。そこで先にも述べた営農集団ともからめて農地の集積や流動化を進めていく必要がある。農業機械に関しても営農集団で共同購入・管理をしたり、農業改良資金や奄美群島振興開発基金を積極的に利用するなどして、ゆくゆくは補助事業に頼らない足腰の強い農業を展開出来たら喜界島の将来は明るいだろう。